

「国家衛生原理」のPR（二）・後藤新平

作家 童門冬二

嬉しい“公衆化”の現況

後藤新平の「国家衛生原理」の国民への周知徹底と、そのひとりひとりの自覚を求めるPRの方法はどのように行なわれたのか、とあれこれ想像しているうちに、目の前でそれを示すような嬉しい現象が起った。

現在のコロナ禍に対する国民の現象である。

身びいきでなく、率直に言ってコロナウイルス禍害への政府・自治体・医療関係者の対応策と国民の受けとめはかなりの成果をあげていると思う。状況を毎日テレビ報道や新聞でみながら、私は今回書こうとした、後藤のPR目的、即ち「日本の大衆を公衆に変えよう」とした目的は、こういう状況ではなかったのか、と思いこんだからだ。

多足の規制破りはいても、国民の大層は“3密”にならないように政府・自治体の要求を守っている。菌とwithも心を改めてその気になりホーム・ステイ（おこもりぐらし）を実行している。いちいち書かないが他の要求もほぼ守っている。

そうさせたのは何と云っても現場の医療関係者たちの時間を忘れた努力であり、40余回断われても、なお収容先を求めて走り続ける救急車の努力である。さらにマスコミではあまり伝えられないゴミの収集処理員たちの苦勞である。

もちろんこれはわずかな例で、総体的には二宮金次郎が云った“積小為大（小を積んで大とな

す）”の成果だ。こういう成果はひとりでは生めない。ひとりというのは、ひとりのリーダーでも生めないし、ひとりの参加者でも生めない。誰かが告げた。

「ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために生きる」

ということが、言葉に出さなくても実践されたからだ。これは4千年の昔、隣りの中国で生れた孔子のいう「恕の精神」と孟子のいう「忍びざるの心」の発露なのだ。

「恕の精神」というのは「相手の身になってものを考える」ということだ。「忍びざるの心」というのは、「困っている人や弱い立場の人は見るに忍びない。すぐ手助けをしてあげる」という衝動を云う。

現在の状況はそんな孔子や孟子の言葉等全然知らずに、孔子や孟子の求める行動をとった。そしてこのことは、すでに関東・東北の大地震災害の時に実現済みである。

2つの地震（津波も）対応で私は東北の子供とお婆ちゃんの云った言葉が忘れられない。

「身近な所で、できることからやる」

“積小為大”の原点だ。理屈は抜きに恕と忍びざるの心を行ないで示す。成果があっても自分では人に告げない。これが現在の公衆状況の底流になっている良識だ。良識だから知的営為だ。だからこそ静かに、しかもいつの間にかコツコツと積み重ねたのだ。

しかしどうするばそういう人々を培うことができるのか。世の中には、

- ① 云わなくてもわかる人
- ② 云えばわかる人
- ③ いくら云ってもわからない人

の3通りの人がいる。一番厄介なのは③だ。後藤新平の性格を考えると、①だけを求め③は苦手だったのではないか。

名リーダー小早川隆景のPR手法

現在の状況をみながら、私は戦国時代の混乱の中で、静かに身近なリーダーシップを発揮した武将を思い出した。「名将言行録」に出てくる目立たない人物である。泉下の後藤新平さんが「知らね一な、そんな奴」と云うのなら、かれを含めてぜひ紹介したい。公衆化はこういう人のリーダーシップが積小為大となって進むのだろうな、とつくづく思うからだ。

人物は小早川隆景だ。毛利元就の3男で元就の戦略的人事配置で小早川家へ養子に入った。元就は陸では中国地方の銀山を支配する吉川家に次男の元春を養子に入れている。

小早川家は瀬戸内海の水軍だ。と云っても当時は半分は海賊だ。

なぜ隆景に目をつけたのか。

- ① 小早川家の家業から海賊業を完全排除した
- ② そのために水軍の意識改革に異常な努力をした。特に今でいうPRを重視した
- ③ PRでは情報の共有・討論を重んじた。特に疑問とその解明に多くの時間を使った
- ④ 結果として小早川水軍は海賊色を拭きし、海峡の水先案内・大坂湾への物流船の警護等の

“公共事業集団”に変質した

- ⑤ 小早川隆景の名は高まった

- ⑥ しかし父の元就は喜ばなかった。隆景は元春と共に呼び出され、元就从ら“三本の矢の教訓”を受けた。そして「本家を凌ぐ者」として最初の一本に擬され、ピシッと折られた

という複雑な立場に関心を持ったからだ。そしてかれの部下指導の言葉に、

「すぐわかったという者にわかったためしはない」

「急ぐことはゆっくり書け」

という、一読してすぐ？と思うようなものを見つけたからだ。

後藤新平さんはおそらく“云わなくてもわかる部下”を求めたから、自然に“すぐわかりました”という即応タイプを好んだのではなかろうか。

隆景は言う。

「私の話には必ず疑問が湧くはずだ。それもひとつやふたつではない。そのひとつひとつを時間にかけて質疑応答のやりとりをし、疑問を完全に消去してからでなければ、仕事は始めない」

考えようによっては、この言葉は幹部に告げているようにも思える。

海賊色をまず拭きしようというのだから、隆景の話も最初はパワハラ色・押しつけがましい・むずかしい・理屈っぽい等のトーンが色濃かったかも知れない。

荒くれ者の多い水軍の連中は、聞いただけで「うっせえ！」と感じただろう。だから犬の条件反射的に、

「わかりました！」

と叫んでしまうのだ(つづく)